

# 中国の伝統的衣類「開襠褲」についての調査および考察

## :アノニマスデザインの知見を応用した臥床担がん患者の病衣（下衣）デザイン提案に向けて

### Survey of *Kāidāngkù*, a Traditional Chinese Lower Garment

### : a Study on the Design of a Clothing (Pants) for Patients Bed-Ridden with Cancer, Applying the Knowledge of Anonymous Designs

藤井 尚子

文化・芸術研究センター

FUJII Naoko

Art and Culture Research Center

本稿は、臥床患者のための病衣を設計するための調査である。筆者は2010年より病衣デザインの研究を行っており、伝統染色技法の一つである「有松・鳴海絞」を応用し、着脱が容易な病衣（上衣）を開発してきた。これらの研究をさらに拡大し、本研究では、病衣（下衣）を設計することを目指す。

本稿で調査対象とした「開襠褲 (*Kāidāngkù*)」は、現代では中国の幼児のための股開きズボンとして知られている。しかし、古代中国においてもさまざまな開襠褲はあった。こうした点からも、開襠褲は、「アノニマスデザイン」といえる。そこで、病床で過ごす患者のための病衣を設計するアイデアを「アノニマスデザイン」から探ることを目的に、さまざまな開襠褲を調査し、その構造と形状を整理した。

This paper is a survey to design clothing designs for bedridden patients. We have been studying the design of clothes for patients since 2010. And We applied one of the traditional dyeing techniques "Arimatsu-Narumi Shibori", to develop a clothing(top)that is easy put on and off to wearing. This study will further expand the previous research and design pants for patients.

The surveyed *Kāidāngkù* is known today as a crotch-opening trouser for Chinese infants. However, there were various *Kāidāngkù*s in ancient China. From this point of view, *Kāidāngkù* is "anonymous design". Therefore, in order to find out the idea of designing clothes for patients to spend on the bed form "anonymous design", we investigated and organized these structures and shapes.

## 1. はじめに

本研究で対象とするのは病衣の下衣である。現状の一般的な病衣は、浴衣やパジャマなど寝衣を着用するケースがほとんどで、その中で下衣はパジャマパンツが相当する。これは、筒状の腰部と、股関節より下方で左右に分離した2本の筒状を組み合わせた単純な構造で、筒状にするため股部と側面を縫製する、前面と背面の2つのパターンで構成されている。また、胴囲(ウエスト)はゴムテープとなっており、大まかなサイズに展開されているものが多い。寝衣の役割には、就寝中の汗の吸湿、皮脂・垢の吸収や、温度・湿度変化対応のほか、ゆったりとくつろぐことができるよう、寝衣に適した素材や形状を選択することが重要であり<sup>1)</sup>、パジャマパンツにみられる筒状構造の下衣は、縫製箇所が少なく余分の凹凸がないことや、身体サイズにフィットしていない形状により圧迫感や拘束感が少ないため就寝時の体勢を邪魔せず、また、浴衣などに比べ寝乱れしにくいことから、快適性とリラックス感を担保していると言える。

しかし、入院加療中の患者、特に、いわゆる「寝たきり」の臥床状態にある患者にとって、パジャマパンツのような筒状構造は、更衣や排泄など、病床でせざるを得ない日常動作には適していない。いずれも介助者のサポートが必要とされるが、例えばパジャマの下衣の着脱には、患者自身も腰部を浮かすなど自助努力が求められる。また、排泄を病床で行わなくてはならない場合は、差し込み式便器・尿器もしくはオムツ使用の場合も、下衣を膝あたりまでずらし下げ、仰臥位もしくは横臥位を取らなくてはならない。下半身をタオルで覆うなど患者の羞恥心に配慮した策は取られているものの、患者の自尊心は、病床での排泄行為において著しく低下させられる<sup>2)</sup>。そして、その一因には

下衣の筒状構造があると考えられる。

下衣の構造は、筒状以外には、浴衣のように打ち合わせ前開型がある。浴衣は直線裁ちして縫製する平面構成となっているため、更衣や排泄などの介助を必要とする臥床患者に着用させることが多い。浴衣のような一部式と、上衣と下衣に分かれた二部式があり、いずれも平面形状であることから、介助者にとっては更衣介助や管理などが行いやすく、その分、サポートされる患者にとっても身体的負荷の軽減が期待できる。しかし、排泄介助では、前開型のため、パジャマ下衣着用時の排泄介助同様に前面がはだけてしまうことには変わらない。また、パジャマなどに比べ寝乱れしやすいことなど、精神的負荷の軽減までは見込まれず、臥床状態で過ごす着衣としては最適とは言い難い。

以上からも、臥床患者が病床で着用する病衣の下衣には、パジャマパンツなどのような従来の衣服形態とは異なる構造が必要であると考えられる。既往事例として、パジャマパンツの片裾から股部を通りさらに反対側の片裾までファスナーとなっており、内股部を全開できるものもある。これは、従来の衣服構造および形態の改造と見做すことができる。介助者にとっては有意であるものの、容易な全開構造に改造するだけでは、患者の自尊心への配慮がなされた病衣とはいえず、病床で日常を送らざるを得ない臥床患者が抱える根源的な課題を解決することは難しいと考える。

そこで、本研究では、患者の精神的負担の軽減に資する下衣のために、従来の既製服などの構造や形態を改造する考え方から離れ、既製服以前の衣服構造および形態に着目し、それらを手掛かりに考えていくこととした。この、既製服以前の衣服構造および形態を、本研究では「アノニマスデザイン」<sup>3)</sup>と称する。アノニマスデザインと考えられる下衣には、種々の民族衣装や、いわゆる「野良着」といった日常的に着用する労働着などを想定した。そのなかから、

病衣にふさわしいパンツ形状で、筒状や前開き型の変形となる構造を持つものとして、「開襠褲」に着目した。開襠褲は、中国の古代よりある袴の一種で、今日では中国・地方部の幼児が着用している、いわゆる「股割れズボン」と呼ばれる伝統的なパンツとなっている。着衣したまま排泄ができるため、トイレトレーニング前後の幼児用に市販されている。また、局部を露出しなくてはならない場面の多い診療現場で使用される病衣や診察着などへの応用事例も、中国の先行研究の中にいくつか見つけることができた<sup>iv</sup>。とはいえ、これらも従来構造のパンツの股部（クロッチ）を縫製しないで開放されている、もしくは、一端を縫製したクロッチを開閉するものであるなど、局部は依然としてはだけたままの構造のため、本研究が目指す解決とは異なるものであると捉えた。

以上をふまえ、まずは、開襠褲の構造を理解するために文献調査を行なった。その上で、文献資料ではわかりにくい構造や形状について明らかにし、病衣への応用の可能性を検討するための知見を得ることを目的に実物調査を実施した。本稿では、調査内容およびその考察をまとめている。なお、先行研究などでは「パンツ」「ズボン」「ボトムス」「下衣」など種々の表記が見受けられるが、本稿では、「パンツ」に統一する。

## 2. 文献調査

### 2-1. 開襠褲について（文献調査）

開襠褲（开裆裤 kāidāngkù）は、現代では伝統的な幼児用パンツと認識されているが、本来は中国古代の服飾の下衣の一つである。中国の伝統的服飾を予め概観する上で、参考としたGao Chunming, *CHINESE DRESS & ADORNMENT THROUGH THE AGES: THE ART OF CLASSIC FASHION*, CYPRESS PRESS, 2010では、下衣は、Chapter 3 Lower Garmentで扱われており、さらにLower Garmentは、Shang, Skirt, Trousersの三節に分けられている<sup>v</sup>。下衣のパンツ類は、Trousersにおいて言及されている。一方、2-2.で後述する沈從文『中国古代の服飾研究 増補版』（京都書院）では、下衣には大きく分けて、スカート状のものとパンツ状のものがあるとしている。前者は[裳 (shang : しあん)] (図1)、[裙 (qún : くん)]<sup>vi</sup> (図2)で、後者は[袴 (kù : こ)]、[褲 (kù : こ)] (図3)である。そのほかに、[脛衣 (jingyi)]、[膝褲 (xiku)]、[套袴 (tàokù)] (図4)といった、各部位を覆う部分的な下衣や、[蔽膝 (bixi)] (前垂)といった、後に装飾的意義が強化されていくものなどがある。GaoはTrousersにて[褲]に言及しているが、具体的に開襠褲の記述はなかった。一方の沈は「開襠の褲 (かいとうのこ)」として扱っていた。そこで、まずは、沈の著書に拠りながら、[袴]、[褲]に着目し、開襠褲の概念を整理してみたい。



図1 [裳] \*1



図2 [裙] \*2



図3 [袴] \*3



図4 [套袴] \*4

### 2-2. 沈從文編『中国古代の服飾研究 増補版』

参考文献<sup>vi</sup>は、文学者であり中国古代服飾研究者である沈從文による540頁にわたる大著である。1974年に編集を始めた当初は、中国には体系的に服飾について論じた書物はなく、本書は、それまで名称のみ知られていた服飾に関わる事物の具体的な形状を明らかにするとともに、数々の新しい解釈を提示した画期的な書物とされている。考古学資料や美術品、墳墓からの出土品など、中国の博物館などに現存する文物を通史に則りながら、それら文物に現れる服飾について言及、構成されている。

本書の膨大なインデックスの中で、本研究で対象とした「開襠褲」や、それにまつわる[袴]や[褲]に費やした頁は多いとはいえませんが、開襠褲の基礎的知見を整理する上で重要な文献といえる。

本書では、[袴]と[褲]を「膝当ては長くなって袴となり、合襠式（また部分が縫い合わせてある形式）のものは褲となったのである」<sup>vii</sup>と定義している。その上で、沈は、弓籠手（本文中では「射鞬」）が袖になる例や、下半身を防護するため胴囲から下げた布（いわゆる褌）である「蔽膝」が、身分を象徴する装身具となっていく例などに触れ、原始社会で生命の保護や防寒で用いられていた防御服が、時代の要請とともに改変されていくことを指摘している。膝当てや套袴 (tàokù)<sup>ix</sup>が上腿にまで延長したと考えられている[袴]は、その前提に「脚部を覆う」目的があり、一方の[褲]は「脚部を覆う」と「股部を縫い合わせる」といった、腰部と脚部の一体化が見られ、現在のパンツと同様の構造が形成されていったことが理解できる。

この「股部」を形成するものが、「襠（以下、マチ）」である。端的に言えば、[褲]はマチがあるが、[袴]にはマチがないのである。マチとは「衣服の布の幅の不足した部分に別に補い添える布」（『広辞苑 第七版』）のことを指し、今日の既製服では、上衣では脇縫の間や、下衣では内股の部分などに加えられているのを目にすることができる。マチを設けることで、着衣が身体に沿い、生地がつれにくく

なり動きやすくなる。中国古代の服飾では、〈江陵馬山楚墓〉（以下、「楚墓」）から出土した衣服の一つ《絳地小菱文錦の綿入れ衣》<sup>x</sup>は、上衣と下衣（下裳）を縫い合わせ、一体化したものである。上衣は、衿丈200cm、両袖を伸ばした長さ345cmの大袖で、それに対し、下裳の幅は狭いため、上下を縫い合わせると歪みが生じてしまう。それを、長さ37×幅26cm前後の四角い布地を上衣と下裳と脇下の3点が交わる部分に巧妙に縫い付けられることで、着用時、下裳が筒型に変形し、上位の胸元は膨らむなど、マチによって平面的な衣服を立体的にする知恵がすでになされていたとされる<sup>xi</sup>。こうした例からも、同時代の衣服設計において、既にマチは有意とみなされていたと想像できる。

同楚墓からは「袴」も出土しており、研究対象とした「開襠褲」とも関連する重要な事例の一つ、《絹に刺繍を施した綿入れの袴》<sup>xi</sup>（図5）（以下、「江陵馬山の袴」と記す）である。腰部と足筒部と裾口部の3部分から構成され、足筒部の前面の上端は腰部と縫い合わせられ、足筒部の後背側の上端（足筒後部の半幅分）は縫製されていない。そして「袴」と称されているが、マチが設けられている。マチは長さ12cm、幅10cmの四角形が股部に縫いつけられており、折りたたむと三角形となる。このように「江陵馬山の袴」にはマチがあるが、沈によると、腰部の後背面が開いている特徴（図6）が「套袴（脛衣）」とみる考え<sup>xii</sup>である。先述の、幅が異なる上衣と下裳を縫い合わせる際に生じる歪みをマチで調整した綿入れ衣と同様に、「江陵馬山の袴」も腰部と足筒部は分離したパーツであり、それぞれの異なる周囲を調整するためにマチを縫い合わせたと考えると、足筒部は「套袴」であり、腰部は套袴を結び付けた紐や帯が太くなったもの、と考えるのが妥当である。



図5 《絹に刺繍を施した綿入れの袴》（江陵馬山の袴）\*5

江陵馬山楚墓 BC3~4世紀（戦国時代中期）の出土品 綿入れ袴  
（沈定文、王丹 編『中国古代の服飾研究増補版』（京都書院）より、筆者作図）

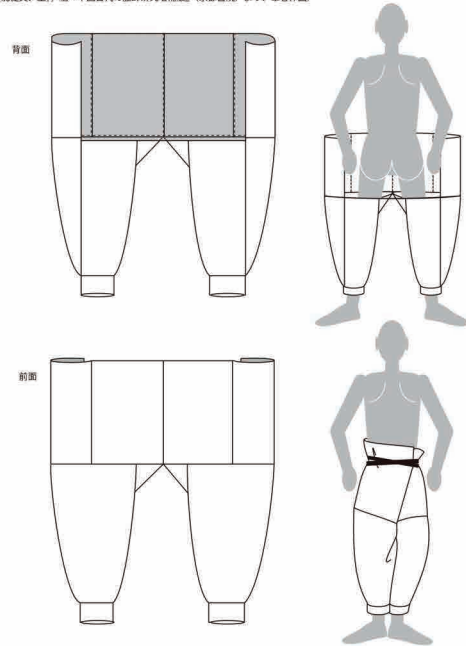


図6

なお、本書では、開襠褲は、「開襠の褲（かいとうのこ）」<sup>xiv</sup>として、福建省福州黄昇南宋墓から出土した女性用袴とともに言及されるにとどまる。「分割れズボンのように、股上が縫い合わされていない形のものは『袴』の典型的な形式である」<sup>xv</sup>とし、「江陵馬山の袴」を開襠褲として分類している。

このことから、開襠褲とはマチのある下衣であり、また、マチが開いている（マチどうしが縫い合わされていない）ものだけでなく、マチが閉じている（マチどうしが縫い合わされている）が、股上が開いている（股部が縫い合わされていない／左右打ち合わせ構造となっている）ものも概念に含まれていることが明らかとなった。

### 2-3. 中国丝绸博物館編『黄岩南宋趙伯澐墓出土服飾展』

沈の著書では、「開襠の褲」については事例紹介にとどまっていた。そのため南宋墓の出土事例の展覧会図録『黄岩南宋趙伯澐墓出土服飾展』（中国丝绸博物館）を参考文献とすることとした。当該展覧会は、2017年5月から9月にかけて、中国浙江省杭州にある中国シルク博物館（中国丝绸博物館：China National Silk Museum 以下、「中国シルク博物館」と記す）で開催された展覧会をまとめたものである。2016年、浙江省台州市で偶然に南宋墓が完全な状態で発見された。そこに埋葬されていた貴人の趙伯澐（Zhao Boyun: 1155-1216）が着装していた、南宋代男性の服飾一式もほぼ完全な形で発掘され、現在の浙江省台州市にある黄岩博物館に所蔵されている。その後、中国シルク博物館の文化遺物保護チームが復元・調査を行い、現在も絹織物の産地として有名な浙江省では、南宋代にはすでに製織技術が確立されていたことを裏付ける、歴史的にも文化的にも重要な遺物として価値づけられた。

発掘された服飾品は全体で76点あり<sup>xvi</sup>、なかでも上衣8枚、下衣8枚、靴1足、襪（靴下）1組、腕輪1本、そし



て左袖に添えられていたハンカチ一枚の全てを着用した状態で埋葬されていたとのことである。いずれも絹製であった。これらの8枚の上衣と下衣は、それぞれの四季ごとに着用する、薄手のものから綿の入った厚手の衣服で、このように埋葬した理由の詳細はまだわかっていないとのことである。

展覧会図録に掲載される画像(図7)によると、〈第一層〉(身体に最も近い層)から〈第八層〉(最も外側の層)まで、上衣・下衣ともに様々な衣服形態が見られる。

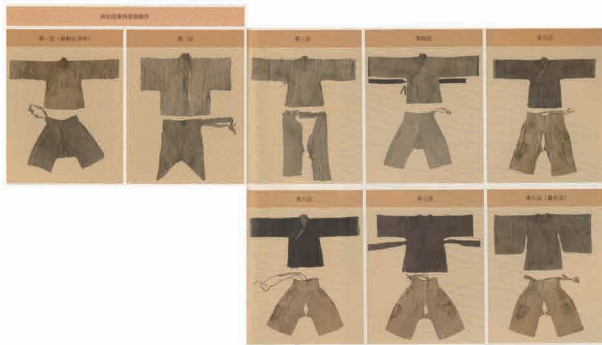


図7 上段左から下段右に向かって〈第一層〉から〈第八層〉\*6

特に下衣に着目すると、「开裆夹裤」(開裆夾褲)4点、「合裆夹裤」(合裆夾褲)3点、「套袴」1点と、いずれも[袴]・[褲]であった。8層の重ね順の理由については不明であるが、最も身体に近い〈第一層〉は合裆褲、〈第二層〉も合裆褲(但し、足先に向かって漏斗型に細まった、つま先まで包まれるタイプ)、〈第三層〉は套袴、〈第四層〉も合裆褲、〈第五層〉から〈第八層〉(最も外側の層)は開裆褲である。〈第三層〉以外は、確実にマチが見られ、開裆褲は、いずれも「江陵馬山の袴」と同じような四角形を半分にした三角形のマチが付いている。〈第四層〉の合裆褲のマチは、広めの菱形のマチを股部で完全に縫い合わせたものであり、また、左右の脚部の外側上端は、屏風状の三つ折りに畳まれブリーツ状<sup>xvii</sup>になっていることがわかる。

図録には8枚の下衣全ての見開き画像はなく、一部画像が掲載されている褲はいずれも前面と背面ともに図版に画像が載っているが、その構造はわかりにくく、実際の着衣形態や着衣状態を想像するのが難しいところもある。だが、南宋代において、貴人の一般的な衣服として下衣はマチがあり、[袴]ではなく[褲]であるということや、それらはマチが縫い合わせられたものと縫い合わせられないものがあり、特に開裆褲は、現在の「股割れズボン」のような構造ではないということが図録からも見て取ることができ、興味深い。その一方で、これらがそれぞれどのように使い分けたのかまでは言及されていないが、8枚それぞれが季節に合わせて着用するものであったとの調査結果を前提とすれば、マチを縫い合わせたほうが防寒に適しており、合裆褲は冬用の下衣だったと考えることもできる。

#### 2-4. 李晓君「童趣无限：近代儿童开裆裤面观」

かつては貴人が着用していた開裆褲は、現代においては幼児用の「股割れズボン」として、対象も構造も変化した。中国近代の服飾研究を専門とする李晓君によると、幼児用

となったのは清朝以降で、当時は礼服の一つとして用いられていたという。さらに、東華大学附属上海紡織服飾博物館(以下、「上海紡織服飾博物館」と記す)に所蔵される清朝から中華民国(以下、「民国」と記す)時代の幼児用開裆褲合計17点を、「円形式」「半円形式」「ブルオンパンツ式」の3タイプに分け、解説している。

「円形式」(図8)は、いわゆる巻きスカートのような構造である。但し、円形式の開裆褲では、左右のパンツは筒状ではなく、展開した状態で、その上端を腰布に縫い合わせている。腰に巻いて着用すると、左右脚部がコの字状に組み合わさり、パンツらしき形状となる。そのため、一枚布のスカートと異なりパンツ(童褲)に分類されている。博物館に所蔵される《浅粉暗花網開裆褲》の、幾何学的な花模様があしらわれた薄いピンク色の絹サテン地の部分がそれである。このことから、巻きスカートのように腰に巻きつけて着用する円形式開裆褲は、前面・後背面ともに開くことになる。これらの開裆褲は、着用が非常に簡単であるため、幼児に適しており、特に正式な行事のための幼児用礼服として用いられたと考えられている。

「半円形式」(図9)は、パンツの脚部はそれぞれ筒状に形成される。脚部は左右とも下半分は筒状に縫合されており、上半分は縫合されず開いている。前面で脚部の上半分を縫合し、一方の背面は、脚部どうして縫い合わせられず、それぞれの上端を腰布に接ぎ合せて、両端とともに開くようになっている。着用すると、現代のパンツの形状と似ているが、後ろが開いている点は、現代のパンツと異なる。開口部は股からウエストまで大きく取られている。上海紡織服飾博物館にある開裆褲17点のうち、10点が「半円形式」にあたる。

「ブルオンパンツ式」(図10)は、脚部の左右両足とも筒状上端を、輪状の腰布に縫合し、さらに、股のマチ部分を形成するため、縫合せず開口を残すタイプである。このタイプは、股に開口部があることを除いて、現代のパンツ(フルレングス・パンツ)と似ているが、通常の前開きパンツのような前立てがなく、引っ張り上げて履く(ブルオン)ことしかできない。これらの胴囲は着用者のウエストよりもはるかに大きく、腰布に縫い付けられた紐(ベルト)で結び固定するものや、腰のくびれがない子どもには肩紐(ストラップ)で着用できるようになっている。

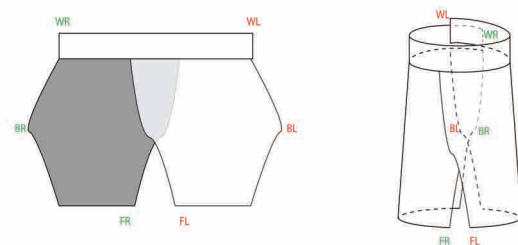


図8 「円形式」模式図

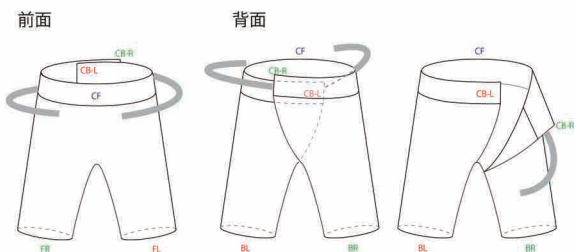


図9 「半円形式」模式図

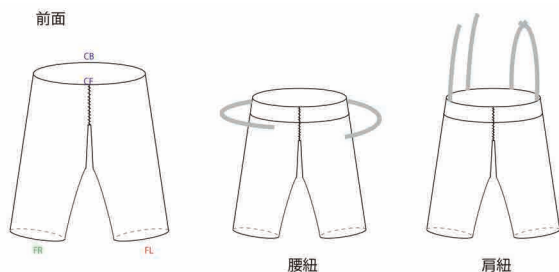


図10 「プルオンパンツ式」模式図

李は、幼児用の開襠褲が現れた清朝以降、西洋の服飾(洋服)の様式も少なからず反映されていることを指摘している。特に、生地や染色、仕立て方法は西洋の影響が色濃いとのことである。包銘新編『近代中国童装実録』(東華大学出版、2006年)の「童褲」(p.125~142)には、開襠褲が14点掲載されており、そのうち明らかに化学染料による染め布やプリント生地などが見られる。また、楚墓や南宋墓から出土した開襠褲に比べ、内股側が裾からマチまでなだらかな曲線裁ちとなっていることなども、西洋のパンツの影響を見てとることができる。

以上からも、19世紀末から20世紀初頭にかけての幼児用開襠褲は、いずれも従来の開襠褲と同様に腰部(腰布)と脚部を縫い合わせた[褲]であるが、マチは、楚墓や南宋墓の開襠褲にみられた四角形や三角形の布(いずれも折りたたまれると三角形になる)とは異なり、南宋墓から出土した〈第五層〉の開襠褲と同様の、マチが脚部と一体化した形状となっている点や、素材や形状も洗練されていることがわかる。なお、博物館の所蔵品となるような開襠褲は、保存状態が良く、色鮮やかな生地や華やかな刺繍などが施され、「晴れ着」の一つであったと見ることもできよう。当時の幼児が、日常的にどのような開襠褲を着用していたかまではわからないが、パンツの生地が絹のサテン地に対し、腰布の生地は吸汗・吸湿性に優れた綿を用いるなど機能面への配慮も見受けられる。その点からも、これらの開襠褲にみる3タイプは、幼児の生理的特性や行動様式を踏まえ、日常着の可能性についても考えられよう。

### 3. 実物調査

#### 3-1. 実物調査の目的及び調査概要

2-1. の文献調査で、開襠褲の通史の変遷を概観し、また、マチの有無やマチが縫い合わされているかそうでないかと

いった違いがあることが明らかとなった。しかし、臥床患者のための排泄介助時に資する病衣(下衣)デザインの手がかりを得る上では、寸法や、実際の着用方法、臥床状態の形状や、排泄の際の使用方法など不明な点が少なからずあった。そこで、実物を視察し、開襠褲の理解を深めるとともに、病衣へのヒントを得ることを目的に、中国において、実物の開襠褲にあたる調査を行なった。

調査地は上海市、浙江省杭州市、江蘇省南京市、北京市で、調査期間は2019年2月27日から3月4日の6日間とした。調査対象は、(1)中国シルク博物館(浙江省杭州市)に保管されている南宋墓より出土した開襠褲(文献調査2-3.)、(2)上海紡織服飾博物館(上海市)の清朝から民国時代の幼児用開襠褲の視察と李曉君へのヒアリング(文献調査2-4.)、(3)南京市博物館の南宋代の開襠褲の見学(《蒂蓮紋羅褲》2003年、南京市高淳区花山南宋墓出土)(江蘇省南京市)、(4)北京服装学院附属民族服飾博物館に所蔵される幼児用開襠褲の視察および同学院准教授蔣玉秋へのヒアリング(北京市)、(5)潘家園舊貨市場にて参考資料収集(北京市)で実施した。なお、調査地および調査対象の選定、実地調査での通訳は、中国少数民族紡織服飾研究を専門とする烏丸知子の研究協力を得た。

本章では、これらのなかでも直接採寸や撮影、または試着が可能であった、(1)南宋代の開襠褲(中国シルク博物館)、(4)明代の開襠褲複製(北京服装学院・蔣准教授)、(2)清朝から民国の幼児用開襠褲(上海紡織服飾博物館・李曉君)の調査内容について述べる。

#### 3-2. 南宋代の開襠褲(中国シルク博物館SACH)

2017年に黄岩南宋趙伯澐墓(以下、南宋墓)の出土品を中国シルク博物館にて展示したことは、2-3.で先述した通りである。これら出土品は、中国シルク博物館内の研究所である「紡織品文物保護国家文物局重点科研基地(Key Scientific Research Base of the Textile Conservation, SACH)」で復元・修復され、種々の科学調査を実施している。現在も調査継続中のため浙江省台州市の黄岩博物館から借り受けた保管資料の中から、開襠褲1点を視察する幸運に恵まれた。本来であれば、800年前の染織品遺物は脆弱で、また文献調査でも明らかなように、ほとんど完全な状態の南宋墓の出土品であることから、直接観察が難しく<sup>xiv)</sup>、非常に貴重な資料である。そのため調査対象の取り扱いには所員に委任し、薄葉紙を敷いた作業台上で取り扱ってもらった。また、採寸も依頼した(図11)。

対象は《纏枝葡萄紋綾開襠褲》(図12)で、趙伯澐の身体に重ね着されていた〈第七層〉の下衣である。



図11



図12



・構造

寸法などは図13の通りである。腰部に脚部の上端が縫い合わせられた構造で、全長105cmある。調査の結果判明した趙伯澐の身長<sup>xix</sup>でも、着用時は裾が地面につく程の長さがある。腰部の胴囲は96cmで、後背面に開いている。腰布の両端にそれぞれ約80cmの長さの紐が縫い付けられている。それを背面で交差させ前面に廻し、前面の中心付近で結ぶ。

南宋代 (12-13C) 黄岩南宋趙伯澐 (13C) の開襠褲 (台州市黄岩区博物館所蔵品)  
中国シルク博物館の保管品を、紡織品文物保護国家重点科研基地所員が採寸 (2019年2月28日)

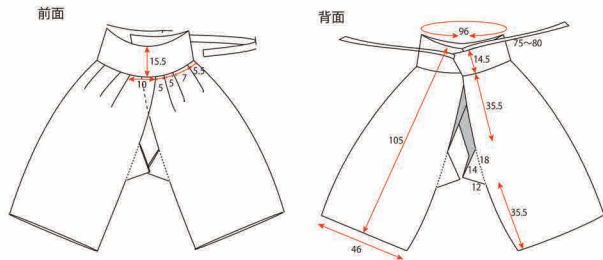


図13

脚部の裾口は広く、約46cm (円周長82cm) ある。左右両脚の外側はワとなっており、内側にはマチが縫い付けてある。採寸によってマチは、およそ長辺28cm (a)・短辺18cm (b)・高さ12cm (c) の二等辺三角形 (図14) であることが明らかとなった。

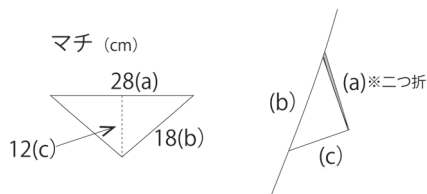


図14

(a) を半分に折りたたむと (c) が「ワ」になる。「ワ」となった (c) が下方に位置する三角形の状態で、(b) と脚部内側を縫い合わせている。さらに、裾からマチ (c) までは縫合しているが、マチ上方から腰部までは縫い合わせられていない開襠褲である。

さらに脚部前面には、襷 (タック) が左右それぞれ3本ずつ取られており、腰部のウエストより多く取られた脚部の生地量のだぶつきを調整しながら、ゆったりとしたシルエットをつくりだすとともに、身体の立体感を形成している。

・素材

絹織物である。ブドウと葉・蔓による葡萄紋はジャカード織で、地は斜文織 (=綾織) で表現されており (図15)、すでに高い製織技術が確立されていたことがわかる。



図15

・着衣形態

取り扱いに慎重を期す貴重な遺物であるため、実際の着用は不可能である。寸法から予想し、およその着衣形態を作図した。身長や一般的な身体寸法に対しかなり大きいため、着衣時は布地がかなり余るであろう。しかし、経年劣化による脆化もあるが、密度の高い薄地の絹織物が素材であったことから、摩擦が少ないため滑りやすく、ごわつかずに滑らかな複数のドレープを寄せながら着装を調整できると考えられる。また、通常より多くの生地量を使い、且つ左右の脚部上方が打ち合わせられていることから、着衣すると股部の開きはほとんど見えないであろうと想像される (図16)。

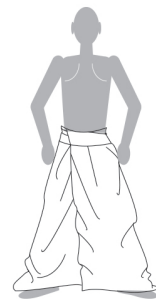


図16

南宗代の貴人が開襠褲や合襠褲を着用しわける理由について所員に尋ねたところ、わからないとのことであった。そのほかに、開襠褲の開口が背面にあることは、文献調査で理解していたが、和式の着物は前開きであり、背面で帯を結ぶことが一般的なため、後開きで、前面を紐で結ぶ開襠褲の構造について疑問があった。そのため、背面が開いており、腰紐を前面に廻し結ぶのはなぜかと質問したところ、「前で結ぶ方が簡単だから」とのことであった。本調査を通して、開襠褲の構造的利便性について、改めて気が付くこととなった。

3-3. 明代の開襠褲複製 (北京服装学院・蒋玉秋博士)

北京市朝陽区にある北京服装学院 (Beijing Institute of Fashion Technology) は、中国で唯一「服装」を名前に含む高等教育機関であり、ファッションデザインや、美術・デザインを学ぶことができる学校である。2019年3月2日、北京服装学院附属民族服飾博物館に所蔵されている開襠褲を見学するため、同学院准教授・蒋玉秋博士の研究室を訪問した。蒋博士は、中国伝統服飾の研究を行っており、関連する著書を多く執筆している。また、研究調査のため伝統服飾の複製も行っており、中国シルク

博物館に所蔵されている明代の開襠褲の複製も今回の調査対象のその一つである。それを採寸および試着させてもらう機会を得た。



図17

・構造

採寸は、対象を机の上に広げ、前面および後背面ごとに行った(図17)。詳細は図18に示したとおりである。

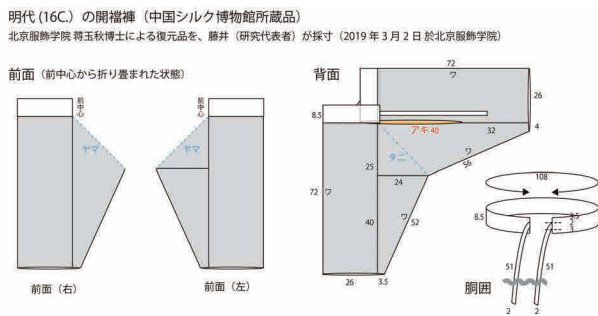


図18

胴から裾までの全長は80.5cmである。腰部の胴囲(=腰布の長さ)は108cmで、腰布の幅は8.5cm、腰布の両端に長さ51cm・幅2cmの紐がそれぞれ縫い付けられている。脚部の長さは72cmで裾幅は左脚29.5cm(円周長59cm)・右脚30cm(円周長60cm)である。パターンは平面裁断である。対象を平置きすると、直線裁ちにされた2枚の生地を縫い合わせた平面構成となっていることがわかる。脚部は、左右ともに72×52cmの四角形を二つ折りにし、できた「ワ」をそれぞれの外側にし、四角形の上辺を腰布に縫い付けると、左右の脚が直角に位置するようになる。左右の脚の内角(=内股)には、さらに別の生地を直角になるように組み合わせられている。マチに相当する部分は、およそ25cm角の正方形のため、マチとしては生地量がかなり多く、脚を閉じた姿勢をとると内股がだぶつく事になる。そこで、正方形の対角線を、前面(前中心)では山折り(図では「ヤマ」)、後背面では谷折り(図では「タニ」)に折り目をつけることで、マチのだぶつきを処理している。なお、左脚部の二枚の生地は完全に接ぎ合わされているが、右脚部の二枚の生地は、背面の裾から上方32cm分は縫製され、残りの上端までの40cm分は縫い合わされていない。そのため、腰布を大きく開くことが可能となっている。

このように、南宋代の開襠褲のように独立したマチではなく、脚部と一体となった形状となっている。しかし、股部の一部が縫合されず開口しており、背面にある腰紐を前方に廻し結ぶ、前閉じ・後開きである調査対象は、他の開襠褲と同様の構造であると考えられる。

・素材

本調査対象である複製された開襠褲に限り、腰布と腰紐は綿織物(白色)、脚部は絹織物(牡丹花の地模様をジャカード織としたサテン地、緑色)である(図19)。いずれも高密度でしっかりとした生地であり、特に絹織物を素材とした脚部は、サテン地(縹子織)のため独特の光沢があり、地模様となっている牡丹花は、照明の加減によって浮かび上がって見える部分と沈み込んで見える部分が生じ、生地色に深みを与えている。また、サテン地は地厚となるため多少重みもある。腰布は細番手の平織地である。



図19

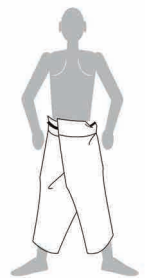


図20

・着衣形態

蔣博士に着装方法を教わりながら試着を行った。まず、腰布の前方およそ40cm程度の幅を両手で持ち、筒状の脚部にそれぞれ脚を通す。腰部を引き上げてから、腰布を当てて腰位置を決め、腰布の前中心から押えながら両手を後ろ手に廻し、腰紐を引きながら左右交差させ、さらに腰布に沿わせながら前方に廻し、前中心で結ぶ。後方の腰布の端は、右手側が上になるよう重ねる。左手側の腰紐は、重なっている腰布の内側から上方向へ引き出して前に廻す。

着衣形態(図20)は、腰巻や巻きスカートまたは腰エプロン(「ギャルソンエプロン」と同様の着想方法であるため、比較的タイトなシルエットとなっている。南宋代の開襠褲(3-1.)の脚部前方には、複数のタックがとっており、そのためウエストはすっきりとさせながらも、立体的でボリューム感のあるフレアスカートのような着衣形態となっていた。一方の明代の開襠褲は、腰部全体を支点に引っ張り、巻き込むことで、脚部は垂直方向にほぼ直下するため、すっきりとした印象である。

なお、開口部については、脚部の余分な生地量は折りたたまれるような形で処理されているため、開口部も内側に折りたたまれることとなり、結果、隠れて見えなくなる。50度ほど開脚しても開口部分は露出せず(図21)、露出するためには、折りたたまれている脚部布を左右にかなり引っ張る必要がある(図22)。なお、マチに相当する部分である正方形も、背面はタニに折られているため、内股に織り込まれた形で収まっている。但し前方のマチはヤマとなっているため、側面の着衣形態はマチ部分が凸状(図23)となる。





図21

図22

図23

明代の開襠褲（複製）の特徴は、1.平面裁断である、2.股部が直角になるよう左右の脚部が腰布に縫い合わされている（結果、平面裁断による腰布は中心付近で折られる形状となる）、3.さらに内股の直角に合わせて別布が脚部に接ぎ合わせられている、4.独立したマチはない点である。1.によってすっきりとした着衣形態を実現でき、2.と3.によって、ゆとりが生じ、下肢の可動域を確保することができる。また、内股の布の形状は、裾に向かって細まっているために足捌きしやすい。その結果、内股の布は、パンツの脚部であり、同時にマチであることを示している。つまり、4.の特徴があるが、しかし、脚部にマチが吸収された形状となっているのが、本対象の特徴であることが明らかとなった。

南宋代の開襠褲と同様に、前閉じ・後開きである。腰布の端が背面にあり、さらに、背面の右側脚部は40cm縫合されていないため、大きく開くことができる。また、開口部についても、折りたたまれており、着衣状態では露出されていない。しかし、必要であれば、脚部布を左右に引っ張ることで開口でき、和装の「身八つ口」のように、着衣形態を整えることもできると考えられる。

### 3-4. 清朝末期から民国の幼児用開襠褲（上海紡織服飾博物館・李曉君博士）

文献調査（2-4.）で詳述した、幼児用開襠褲について李博士の協力により実物調査が実現した。2019年3月1日に上海紡織服飾博物館（Shanghai Museum of Textile & Costume）の所蔵品保管庫の一室にて行った。

前もって文献調査を行っていたこともあり、タイプ別の構造について理解することを目的に行った。そこで、当該博物館に所蔵される3タイプの幼児用開襠褲17点のうち、「円形式」2点（内、1点は「童裾」に分類）、「半円形式」6点の計8点を準備してもらった。「ブルオンパンツ式」は保管状況の関係で見ることが叶わなかった。調査対象の所蔵品の取り扱いは李博士が行い、1点ずつ机上に平置きし、開閉しながら構造を確認、撮影を行った。

大凡は2-3.で述べた通りである。実物調査によって、理解を新たにした点は以下のとおりである。

#### 「円形式」

##### ・構造

文献調査で言及されていた《浅粉暗花綢開襠褲》（図24）のほか、参考に、童裾（スカート）《浅緑緞繡花腰裾》（図25）の2点を見ることができた。



図24



図25

《浅粉暗花綢開襠褲》の寸法は、丈行き36cm、胴囲43cm、裾幅24cm（一枚につき）となっており、着用すると、胴囲はおよそ21.5~22cm、裾幅は12cmとなる。《浅緑緞繡花腰裾》（丈行き51cm、胴囲62cm、裾幅32cm（一枚につき））に比べると、小さく、まだ歩けないような乳幼児用の礼服の一つであるとのことであった。

いずれも展開した脚部2枚の上端が、腰布に縫い合わされている、「暖簾」のような構造である。《浅粉暗花綢開襠褲》は、[褲] であるが、脚部は筒状ではなく、腰布で巻く。筒状になっていない脚部は開いており、腰布に接する上方向は広く、裾側に向かって狭まっていく逆台形の形である。これらは緩やかなカーブで繋がっている。他方の[裾]はスカートのような役割があることから、裾方向に広がる台形型となっている。巻きスカートのように着用するが、しかし、《浅粉暗花綢開襠褲》と同じように、腰布に2枚の台形型がそれぞれ縫い合わされている。腰布の両端には、腰布と共布で作られたループが縫い込まれている。このループに別の紐を結びつけて使ったか、もしくはループ同士を留めるボタンのようなものがあってもいいかもしれないとのことであった。

《浅粉暗花綢開襠褲》は、腰布の中央が前中心となり、腰布の両端を後ろに廻して腰部で留める構造は、先述された南宋代・明代の開襠褲と同構造である。脚部のそれぞれの布が、左右それぞれの脚に半円状に巻かれており、着衣状態では、前後が開いている状態となる。脚部の布の重なりは、[褲] と [裾] では異なっており、[褲] の方が深く打ち合わさっている。

##### ・素材

明代の開襠褲と同じく、腰布は木綿地、脚部は絹地と



なっている。調査した幼児用開襠褲は、いずれも「裏地」が付いており、素材は木綿地である。腰布は巻きつけ・引っ張り・結ぶ、といった物理的負荷がかかることから、丈夫な木綿地は適当である。また、肌に直接触れる部分であるため、肌触りがよく、吸汗・吸湿性に優れる素材が適しており、腰布および脚部の裏地には木綿が相応しい。

《浅粉暗花網開襠褲》の素材は、2-4.ですでに触れているが、裏地には薄いピンクと水色のストライプの木綿地が使われている。腰布は幾何学的パターンのプリントが施された木綿地であり、生地模様や染色方法からも、伝統的な中国のパターンではなく、洋服生地を用いていることがわかる。全体の色調を合わせることで上品な印象となっている。

### 「半円形式」

#### ・構造

調査対象の6点は、すべて背面側が開く。また、背面側にある腰布の両端に縫い留められた腰紐を引っ張り、背面で交差させて前中心で結び形式になっている。内5点はほぼ同形状で、脚部の股部には、独立したマチはなく、脚部の形状の中に取り込まれている。マチに相当する部分は裾幅に比べると広く取られ、裾幅と股は緩やかな曲線で繋がりが、身体形状に対し余分な生地分量をできるだけ少なくする工夫がなされている。そのため、脚部は緩やかな曲線形状で身体の形に沿うようになっており、シルエットは現代のパンツスタイルと変わらない。

残りの1点は、背面が開く構造は同じであるが、股部が異なっている。こちらも独立したマチがなく、また、脚部形状のなかにマチに相当する部分を設けてもいない。そのため、本来はマチがあるはずの股部は、そのまま開けてある(図26)。結果、開脚など下肢の動きにも対応できる構造となっている。これは、今日、中国の地方部の幼児が着用する「股割れパンツ」の股部とほとんど同じ形状であり、その原型と言えるものであろう。また、本稿で取り上げてきた開襠褲の中でも、脚部をもっともタイトにすることが可能な形状にもなっている。なお、サイズが全長30cm未満で、「半円形式」開襠褲の中でも特に小さいものであった。これを着用する対象者は、年齢の低い乳幼児とのことであった。まだトイレトレーニング前の乳幼児にとっては、着衣したまま排泄できる構造ともなっており、利便性があったと考えられる。

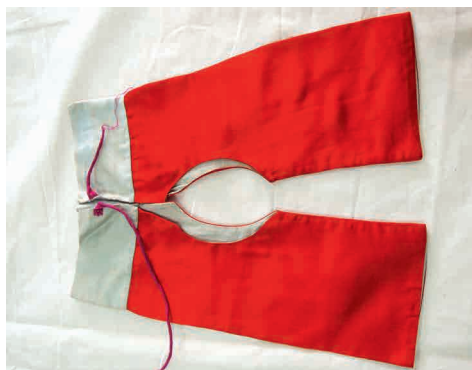


図26

#### ・素材

腰部の腰布・腰紐と、脚部で構成されている「半円形式」は、「円形式」と同じように、腰布・腰紐は木綿地を、脚部の表側は絹地(一部木綿地(《紫色棉布開襠褲》))を、裏側は木綿地を使用している。木綿地はプリントされたものが多く、いずれも洋服用の生地である。一方の絹地はサテン地特有の光沢と鮮やかな染色がなされ、また、その上に中国の伝統的な刺繍が施されているものもある(《天藍緞彩綉天花卉紋開襠褲》(図27))。裏地となる木綿地のプリント生地は、更紗調花模様プリント(《天藍緞彩綉天花卉紋開襠褲》・《柳緑地二色花網開襠褲》(図28))、トランプのカードをモチーフとしたプリント(《紫色棉布開襠褲》(図29))があり、また、先染めによる格子柄(《桃紅網開襠褲》(図30))もあった。裾には別布の飾り布に伝統的な刺繍がされたものやコード刺繍が施されたものなど、装飾性に富んでいる。このことから、これらの幼児用開襠褲は、特別な日に着用する「晴れ着」だったであろうことや、日常着である場合でも、裕福な家の子どもが着用したのではないかと想像される。その一方で、表地を基調色に組み合わせられた裏地のバリエーションの豊かさは、いずれも子どもの健やかな成長を願い、様々な生地を選んだり、美しい刺繍を施したりと、時間と手間を掛けて作られていることがわかる。



図27



図28



図29



図30



## 4. おわりに：病衣応用へのヒントのために

### 4-1. 考察

本稿では、中国の伝統服飾の一つである「開襠褲」に着目し、その構造や形状について文献資料および実物資料から調査を進めてきた。表1は、調査対象とした開襠褲の構造および形状を分類したものである。

開襠褲と一口に言っても、時代ごとの社会的・文化的指向や、着用対象者となる同時代の人々の価値観によって、その構造および形状は変容している。今回の調査をとおして開襠褲の変遷を通史的に追うのではなく、その独特な構造や形状を明らかにすることを目指した。その理由は、開襠褲を「アノニマスデザイン」の一つとみなしたためであ

表1 開襠褲の構造および形状の分類

開襠褲	楚 (6B.C~3C) <small>(江陵馬山一號楚墓)</small>	南宋 (13C) <small>(中国シルク博物館)</small>	明 (14~17C) <small>(北京服装学院)</small>	清~民国 (20C初頭) <small>(上海紡織服飾博物館)</small>
腰部 (胴囲)	3枚接合 腰紐は別	1枚 両端に紐が接合	1枚 両端に紐が接合	円形式 半円形式 プルオン 1枚腰布 1枚腰布 1枚腰布 腰紐 腰紐 腰紐 ループ
脚部	筒状 片脚: 2枚接合 裾: すぼまる (別布)	大きな筒状 片足: 1枚布 前面にタック	筒状 片足: 2枚接合 裾方向にすぼまる	筒状 片足: 1枚 裾やかな カーブ 筒状 片足: 1枚 裾やかな カーブ 筒状 片足: 1枚 裾やかな カーブ
股部	開き (後ろ) 腰から大腿部 の一部まで	開き (後ろ) 腰から膝裏あたり まで	開き (後ろ) 右側脚部の腰から 40cm ほど	開き (前・後ろ) 腰から 股部のみ
マチ				なし (見かけの マチ)
シルエット	胡服 	フレア スカート 	ギャルソン エプロン 	巻きスカート 股割れズボン 

る。日常生活に浸透するアノニマスデザインは、長い時間と多くの無名の人々によって洗練された過程そのものである。それは、事物の本質が彫琢され研鑽されていく過程とも言い換えられよう。開襠褲の独特の構造や形状も、長い時間をかけ形成されたものであり、その背景をある、使いやすさや動きやすさといった生理的な理由や、身だしなみや願望といった社会的な理由などを探ることができるのではないかと。そして、それを手がかりに、病衣(下衣)のデザイン開発および提案につなげていくことが、本研究の最終目標である。

今回の調査の中で、マチの意義は特に興味深いものであった。衣服は、人の身体を覆うものであり、一般的に織物や編物など布を材料とする。布は紙などに比べ、伸展性があるため変形するとはいえず、複雑な局面で構成される身体を、隙間なく密着するように覆うのは困難である。そこで、可展面を構成しながら身体を覆うために必要となるのが、マチ(襠)である。「衣服の布の幅の不足した部分に別に補い添える布」(『広辞苑 第七版』)であるマチは、小さなパーツであるが、衣服を主に構成する身頃の前面および背面の間にマチを設けることで、身体の三次元曲面にある程度接する立体構造として成り立つ。このように、マチを設けるメリットの一つには、立体構造を確保できる<sup>xx</sup>といった点にある。

なお、立体構造の確保といっても、ジーンズやチノパン、スラックスなど今日の既製品の下衣にはマチは見られない。それは、上半身よりも下半身は可動域が限定的であることも理由の一つであろうが、しかし、前面および背面パターン(型)のなかに、シルエットといったスタイリングを決定づける見た目の立体感を創出する形状が含まれており、その形状が、マチと同じ役割を果たしている。他方、スポーツパンツやクライミングパンツなどズボンの前後の間に設けられた菱形のマチ(ガゼット・クロッチ)や、幼児用のモンキーパンツに見られる臀部を覆う丸いマチなどは、開脚しやすく運動量を補う役割を果たすなど、より動的な状況下にて着用されるものに用いられている。このことから、マチは立体構造の確保だけでなく、動きやすさという点においても着目できる。

開襠褲は、字義通り「マチ(襠)が開いている褲」であるが、本稿で取り上げた開襠褲のマチについては形状も様々で、構造上開いてしまっているものから、動きやすさや使いやすさのために意図的に開けているものまで、様々あることがわかった。

#### 4-2. 今後の展望

病衣への応用としては、臥床状態での排泄行為の支援が可能かを考えていかなければならない。そのためには、当然、トイレトレーニング前の乳幼児が着用した、現代的な「股開きズボン」スタイルの幼児用開襠褲に大きなヒントがある。しかし、股部が開いたままの形状は、成人の社会通念上、受け入れ難いものであることは容易に想像できる。また、「プルオンパンツ式」は通常のパジャマパンツと構造的に変わらないため、行為動作が困難であり不適である。一方、「半円形式開襠褲」は、半分パンツであり、半分は浴衣のような腰巻型の構造である。「履く」と「巻く」のメリットを、二つの更衣動作に振り分けることができる点は、病衣への応用として一考の価値があると考えられる。「巻く」は現状の病衣としても着用されている浴衣に近く、すでに確立されている病衣交換方法などを応用することもできるため、介助者にとっても馴染みやすく、負担軽減に資すると思われる。その点では、「明代の開襠褲」の構造および形状も大きな手がかりとなる。なお、開襠褲と浴衣の異なる点として開きの構造にある。開襠褲は前閉じ・後開きで、浴衣はその逆である。浴衣を病衣とするのは、前開き構造のためであり、はだけやすく、治療や看護行為に最適と考えられているからである。しかし、はだけやすさという点は、患者にとっては少なからず抵抗感があるだろう。以上をふまえて、排泄行為の介助や支援の際、前開きと後開きのどちらが精神的負荷の低減が見込めるか、こちらも検討する必要がある。

さらに、「円形式開襠褲」以外は、「履く」行為が必要であることがわかった。「履く」行為は、臥床状態にある患者にとって少なからず困難ではあるが、足首を筒状にすることにより、浴衣特有の足元のはだけや寝乱れしやすさは防ぐことができる。「履く」行為に資する形状についても、今後、実験の上、検討しなくてはならない。一方、実験の結果、臥床患者にとって更衣動作の「履く」および「巻く」行為が、やはり難しいようであれば、中国の伝統的下衣の一つである「套袴」が、一つの手がかりになると期待できる。今後は、套袴のような分割された下衣も含め、病衣の可能性を考えることも重要であろう。

今日では、このような伝統的な服飾を、私たちが日常的に着用するかといえば、それは皆無であり、あるとすれば、舞台衣装やコスプレの衣装などに応用される程度であろう。しかし、沈が指摘しているとおり、私たちが良く知る衣服形状も、その原型は身体を部分的保護する道具であり、それらが延長され、衣服概念が形成されてきたことをふまれば、いかに古い服飾であろうとも理解の手がかりとでき、また、それらを構造的に捉えれば、現代への応用も可能であると考えられる。病衣は、病気という非日常で特殊な状況下で着用するものであるが、しかし、それを着用することは患者にとっての日常でもある。アノニマスデザインの知を手がかりに、私たちにあって着衣することの大切さや本質に迫りながら、実質的な提案につなげていきたい。



- <sup>1</sup> 田村照子編『衣環境の科学』建帛社、2008年/p.140
- <sup>2</sup> 宮本あづさ「床上排泄時の患者の心理 一気兼ねと自尊心に焦点を当てて」日本看護協会看護研修学校編『日本看護学会論文集2成人看護』1988年/pp.79-81
- <sup>3</sup> アノニマスデザインの定義は、未だ過渡にある。日本のデザインにおいては、インダストリアル・デザイナーの柳宗理による言説がよく知られている。1960年に東京で開催された世界デザイン会議で、「デザイナーの自由と創造」の題目で発表した柳が、当時の商業主義的なデザイン(インパルス・デザイン)への疑義とともに、それと対置する「決定的な形態」を持つ製品(「製品そのもの」)のデザインを「アノニマス・デザイン(無名性のデザイン)」とし、柳にとっての理想のデザイン(スタンダード・デザイン)の本流に位置付けたとされる。その後、2012年に京都工芸繊維大学に於ける「アノニマスデザイン2.0」では、柳宗理の言うアノニマス・デザインをさらに拡張し、「匿名性と顕名性の間という概念だけでなく、近代システムと伝統システムの間に位置付けられる」とされている。(北田聖子「アノニマス・デザイン」はつくり得るか 一柳宗理の、発見されることへのプロジェクト」『デザイン理論.61』pp.35-48を参照)。
- 本研究でのアノニマスデザインは、現在、私たちが「当たり前」とする事物の原点にある、先人たちの知恵や創意工夫によって形成された成果など、素朴であるが本質的な創造活動などの意味において用いることとした。そのため、デザイン史における「アノニマス・デザイン」とは立つ位置がやや異なっていることから、「アノニマスデザイン」と表記している。
- <sup>4</sup> 钟冬秀, 李桂英, 吴莲香, 刘华萍「病人开裆裤的研制与临床应用」赣南医学院学报第26卷第3期,2006年、陈建霞, 吴琦琦, 金明亮, 金润女「改良式开裆裤在肠镜检查中的应用」护理学杂志第24卷第11期(综合版),2009年 p49、吕凤丽「妇科患者专用开裆裤的设计与应用」护理管理杂志 第21卷第10号(抄録)2006年.p.52、张智群, 栗绍洁, 别芸「小儿髌人字石膏固定术后开裆裤的研制及应用」护理管理杂志 2013年第13卷第6号(抄録)2013年、p.417など。いずれも、医療・看護に資する視点から幼児用開襟襪を病衣に応用した事例である。
- <sup>5</sup> Gao Chunming, *CHINESE DRESS & ADORNMENT THROUGH THE AGES: THE ART OF CLASSIC FASHION*, CYPI PRESS, 2010年、p.120-131
- <sup>6</sup> [裳]は、男女ともに着用する。殷・周代は、二枚の布を前面と背面から合わせ、腰につけられた紐で結びつけるものであり、漢代には一枚の布を巻きつける形となった。[裙]は、主に女性が着用し、胴囲を二周するほどの長さの布帛を前方から後方にまわして着用する下衣である。胴囲の布を寄せてプリーツ状にしたものである。
- [裙]は、表着であるが、なかには古代中国では長い上衣の内側に下着の様に着用したとされている。(Gao 2010年:前掲書p.124)
- <sup>7</sup> 沈従文 編、王矜 増補『中国古代の服飾研究 増補版』古田真一・栗城延江 翻訳、京都書院、1995年
- <sup>8</sup> 沈 1995年:前掲書pp.14~15
- <sup>9</sup> 二つの「筒子」と呼ばれる筒状形状を、両足に履き、筒子の上部を腰に結んだ別の縄に結びつけて使用するもの。秦もしくは漢時代以前に、脚の保護と保温を目的とした。歴衣ともいう。日本では「脚絆」が類似しているが、脚絆は脛に接するように巻きつけるものに対し、套袴は脚部に余裕があり、袴を着用したその上からさらに着用する例もある。
- <sup>10</sup> 沈、1995年:前掲書p.88
- <sup>11</sup> 沈、1995年:前掲書pp.87~89
- <sup>12</sup> 沈、1995年:前掲書p.93
- <sup>13</sup> 但し、「綿入れの袴は、かなり完全な袴の形態にまで発展しており、裾は口が狭まり上部は股割れになっているが、両足筒部分も別々に分かれず、腰部の生地をつけて左右につなげることによって、袴全体を一体のものとしているのである。またデザインや縫製技術も高水準にまで達している。」(沈、1995年:p.94)とし、套袴の延長にあるが、革新的な構造となっていることに言及している。
- <sup>14</sup> 沈、1995年:前掲書p.94
- <sup>15</sup> 沈、1995年:前掲書p.94
- <sup>16</sup> 66点(<https://read01.com/ozkQyP.html#.Xclldhi3APOQ>) (2019/11/8閲覧)や77点(<https://zi.media/@yidianzixun/post/MAq1aW>) (2019/11/7閲覧)など、複数の情報が見られたが、参考とした図録資料の記載に則った。
- <sup>17</sup> 中国丝绸博物館編『黄岩南宋趙伯澐墓出土服飾展』中国丝绸博物館・紡織品文物保護国家文物局重点科研基地 2017年、P.39
- <sup>18</sup> 現に、実物調査地の一つであった南京市博物館での宋代の袍や袴は、一

定の温度と湿度を保ち、且つ耐久性もあるイギリスから輸入したガラスケースに入れて厳重な展示となっていた。

<sup>19</sup> 175cm(<https://read01.com/ozkQyP.html#.Xclldhi3APOQ>) (2019/11/11閲覧)

<sup>20</sup> 筆者の先行研究「有松・鳴海絞を用いた脱着容易性と回復意欲に資する病衣デザインの学際的研究」(基盤研究C 課題番号22615038)にて研究・開発を行なった病衣デザインにおいて、脇身頃にマチを取り付け、病衣の更衣動作に資するようにしたのも、同様である。

## 参考文献 (五十音順)

- Gao Chunming, *CHINESE DRESS & ADORNMENT THROUGH THE AGES: THE ART OF CLASSIC FASHION*, CYPI PRESS, 2010年
- 北田聖子「アノニマス・デザイン」はつくり得るか 一柳宗理の、発見されることへのプロジェクト」『デザイン理論.61』pp.35-48
- 沈従文 編、王矜 増補『中国古代の服飾研究 増補版』古田真一・栗城延江 翻訳、京都書院、1995年
- 田村照子編『衣環境の科学』建帛社、2008年
- 中国丝绸博物館編『黄岩南宋趙伯澐墓出土服飾展』中国丝绸博物館・紡織品文物保護国家文物局重点科研基地、2017年
- 钟冬秀, 李桂英, 吴莲香, 刘华萍「病人开裆裤的研制与临床应用」赣南医学院学报第26卷第3期、2006年
- 陈建霞, 吴琦琦, 金明亮, 金润女「改良式开裆裤在肠镜检查中的应用」护理学杂志第24卷第11期(综合版)、2009年、p49
- 张智群, 栗绍洁, 别芸「小儿髌人字石膏固定术后开裆裤的研制及应用」など。护理管理杂志 2013年第13卷第6号(抄録)、2013年、p.417
- 包銘新編『近代中国童装美録』東華大学出版、2006年
- 黄伟伟 李俊 郭贝「婴幼儿用裆部开合结构开裆裤的设计分析」国际纺织导报2011年第6期、pp.56-58
- 李晓君「童趣无限:近代儿童开裆裤面观」東方收藏2012年第4期、福建日报报业集团、2012年
- 吕凤丽「妇科患者专用开裆裤的设计与应用」护理管理杂志 第21卷第10号(抄録)、2006年、p.52
- 宮本あづさ「床上排泄時の患者の心理 一気兼ねと自尊心に焦点を当てて」日本看護協会看護研修学校編『日本看護学会論文集2成人看護』1988年、pp.79-81
- <https://read01.com/ozkQyP.html#.Xclldhi3APOQ> (2019/11/8閲覧)
- <https://zi.media/@yidianzixun/post/MAq1aW> (2019/11/7閲覧)
- <https://read01.com/ozkQyP.html#.Xclldhi3APOQ> (2019/11/11閲覧)

## 引用文献

- (図1)(図2)(図3)(図4)
- Gao Chunming, *CHINESE DRESS & ADORNMENT THROUGH THE AGES: THE ART OF CLASSIC FASHION*, CYPI PRESS,2010年
- \*1 Red Skirt, Ming Dynasty. Shandong Provincial Museum. Jinan, Shandong, China.(p.123, Fig235を引用)
- \*2 Phoenix-tail skirt with cloured embroidery. Qing Dynasty artefact. (p.126, Fig243を引用)
- \*3 "Big mouth trousers" of cotton, emboided with clusters of blossoms. Excavated from tomb of Lord of Qi; Acheng, Heilongjiang, China (p.130, Fig253を引用)
- \*4 Leggings known as *taoku*, with trimmed cuffs. Qing Dynasty artefact. (p.129 Fig249を引用)
- (図5)
- 沈従文 編、王矜 増補『中国古代の服飾研究 増補版』古田真一・栗城延江 翻訳、京都書院、1995年
- \*5「絹に刺繍を施した綿入れの袴(N-25)」(p.93、図45を引用)
- (図7)
- 中国丝绸博物館編『黄岩南宋趙伯澐墓出土服飾展』中国丝绸博物館・紡織品文物保護国家文物局重点科研基地 2017年
- \*6 趙伯澐服飾着装順序(pp.64-65を引用)
- その他の図および表 : 筆者撮影及び作成

---

謝辞

調査にあたり、調査地選定および旅程調整と通訳くださった鳥丸知子氏、実物調査の際、快く資料を提供いただいた黄岩博物館 趙安如氏、中国丝绸博物館・修復技術部 汪自強氏および関係者各位、東華大学 李晓君氏、北京服装学院 蔣玉秋氏に、この場を借りて御礼申し上げます。

本研究は 2018年度科学研究費補助金(基金)「アノニマスデザインの知見を応用した臥床担がん患者の病衣デザインの研究」(研究代表者 藤井尚子 基盤研究C 課題番号17K00726)(JSPS KAKENHI Grant Number JP17K00726)の2018年度調査についてまとめたものである。